

427) 赤の他人

我輩は写真を撮るのが好きで、色々なカメラを持っている。大きいものではリンホフ、小さいものではハーフサイズカメラなどである。或るとき、ブローニー判のカメラを持ち出して、ちょっと変わりゆく銀座の光景などを写真におさめていたのでありますが、三脚を着けていたので、三脚の先が通行人の膝のあたりにチョイとあたってしまった。私はすぐに、「どうも済みません！」と言ったつもりが、何かの拍子で「どうもご無沙汰です！」と言ってしまった。すると向こうもニコリしながら、「いや～どうも！どうも！ご無沙汰しまして、イヤー今日は写真撮影ですか？」とえらく親しげに言うのである。あれっ、ひょっとしてこいつは知り合いだったっけと、一瞬頭の中で、過去の人脈をたどってみたのだが、どうしても思い出せない。やはり赤の他人だ。しかしここまで来るとこっちも引っ込みが着かない。「ところで、これからどちらへ？」「いや～ちょっとそこの本屋さんまで…」、「あ～そうですか、じゃ～近いうちにまたっ！」。ナニが近いうちにまたってんだ～。このスットコドッコイが～。と内心思ったのでありますが、このオッサンも今頃ナニを思っているだろうか。これもサラリーマンの職業病の一種かも知れマヘンナ～。